

「青丹よし」は、「奈良」に掛かる枕詞として、往時の「奈良の都」を彷彿とさせる言葉として、今日迄もよく知られています。

「万葉集」に、「あをによし」を用いて詠んだ歌は27首あります。

また、「あをによし」は、「古事記」「日本書紀」においても、万葉の時代よりも古い時代の出来事を記した記事の歌謡の中に、記・紀あわせて3首の歌に見られます。

これら多くの「歌」を見ると、「あをによし」に掛かる言葉・「あをによし」が修飾する言葉は、「奈良+〇〇」と加わる言葉が、少しずつ異なっています。その差異は、時代の経過に由るものが大きく見られる、とともに、詠み手の心情や立場による「あをによし」の意味づけ方の違いも見られます。

万葉歌人たちの、「あをによし」の意味づけ方とその変化について、歌が詠まれた年代を追って考えて見ました。

「奈良には、絵や化粧に用いる良質の青色の土壌顔料があった」と言われます。(*)当初、「あをによし」は、奈良山の辺りで「あを(青)に(土)」(青色の顔料にする)を採取していたことにより、奈良山を修飾するようになった。「よ」「し」(感動・詠嘆を表す間投助詞)を加えて語調を整え、「おう青土あおつちよ」と言った意味の詞であったと思います。歌が詠まれ広く謡われるようになったのは、飛鳥時代の初期(6世紀頃)からと思われませんが、先ず、「古事記」に記された“仁徳天皇と皇后・磐之媛の物語”にある歌を見ます。(磐之媛が難波宮を去り、淀川を遡り木津川を遡って、山背やましろの筒木から奈良山に至って 故郷の葛城山麓を望んだ時の歌。)

- ① 「つぎねふ枕詞 山背河やましろがわを 宮上り 我が上れば あをによし(阿袁邇余志) 那良ならを過ぎ 小楯をだて枕詞 倭やまとを過ぎ 我が 見がほし国は 葛城高宮 我家わぎへのあたり」(59番) (「日本書紀」歌謡 54番にも)

そして、「万葉集」

巻十三は、古くから伝えられた長歌謡を集めた巻、その“近江へ通う歌”に、

- ② 「そらみつ枕詞 大和の国 あをによし(青丹吉) 常なら山越えて
山背やましろの 管木つつきの原、、、」(13-3236番)
或る本の歌として、(3237番)

- ③ 「あをによし(緑青吉) 平なら山過ぎて もののふの枕詞 宇治川渡り、、、」
の、作者不明の歌があります。

奈良山は、大和と山背の境の峠、国境をなす丘陵であり、近江へ向かう時、また、木津川を伝って摂津へも出入りする、謂わば交通の要衝です。遠路往来する人は、古来、旅の安全を願って通過する土地を褒める「道行の歌」を誦謡したと言われます。

①②③の歌謡に見られる「あをによし」は、「奈良山」に対する褒め言葉として用いら

れ、国境の地を歩む、その足元の「土」を讃える意味を含んだ詞であったと思います。次の④⑤の歌にも、同じ見方が繋がっています。

④「味酒うまぎけ 三輪の山 あをによし(青丹吉) 奈良の山の 山の際に い隠かくる
まで、、、しばしばも 見放さけむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや」(1-17番)
都が近江の大津宮に移る時(667年)、飛鳥の地を去る惜別の情を、額田王ぬかたのおおきみが詠んだ歌です。(三輪山をずっと見続けていたい。青丹よし奈良山を越えてしまうともう見えなくなる。その道中は、雲が山を隠したりしてはいけない。)

⑤「、、、そらにみつ 大和を置いて あをによし(青丹吉) 平山ならやまを越え
いかさまに 思ほしめせか、、、」(1-29番)
都が、再び飛鳥の地に戻って(672年)およそ10年後、柿本人麻呂が、“近江の荒れたる都を過ぐる時”大津京の荒廃を悲しんで詠んだ長歌に、詠まれています。

この時期になると、歌が宴会で謡われ、官人たちが歌を書き記すことが多くなり、「あをによし」には「青丹吉」の文字を当てることが一般的になったと思われます。「丹」は、“赤色の鉱物”を称しており、「丹生にふ(土、赤い土)」にも通じます。(*)「吉」は、“よい、めでたい”を意味するところから、「あをによし(青丹吉)」は、「青土・赤土のよい」意味と見られるようになったと思われます。

しかし、③の或る本の歌(奈良時代に詠まれた歌を、付け加えたと見られている)の書記は、「緑青吉」です。記した人は、奈良山に掛かる「あをによし」は、本来、“青色・青土のよい”意味だ、と見ていたことが分かります。

聖武天皇が、長屋王の佐保の宅にて、新しく別棟に建てた室むろを、寿ことほぎした歌です。(724年・神亀元年・聖武天皇即位)

⑥「あをによし(青丹吉) 奈良の山(奈良乃山)なる 黒木くろきもち
造れる室は 座ませど飽あかぬかも」(8-1638番)
“青土と赤土の土壌の良い(奈良山)”(そこで育った黒木)の意味で詠まれたと思います。(佐保の宅の、北方直ぐ近くが、奈良山)

次の歌は、「青丹よし」の褒め言葉を、「奈良」に掛けなかった、唯一の例です。

⑦「悔くやしかも かく知らませば あをによし(阿乎尔与斯)
国内くぬち(久奴知)ことごと 見せましものを」(5-797番)
“青土、赤土の、よい土壌は奈良の地に限らない。ここ筑紫国、いや日本全国ことごとく「青丹よしだ」、くまなく見せてやればよかった。筑紫国守の山上憶良は、こんな意味で、「日本挽歌」(大伴旅人の妻の死を悼んだ歌)に詠み込んだものと思います。(728年)やがて、

平城京(当時の木簡は「奈良京」と記す。)が整い、人々が集まり、大寺院や神社が更に立派に整ってくると、「青丹よし」(以後この文字で記す。)が修飾する言葉は、「奈良山」から「奈良の都」へと変化が見られます。

⑧「あをによし(青丹吉) 奈良の都(寧樂之京師)は 咲く花の

薫にほふがごとく 今盛りなり」(3-328番)

歌は、太宰府の宴会において、小野老おののおゆ(太宰少弐しょうに・次官)が詠んだものです(729年)。前年の春、都に上り、目にした都の人々や建物の華やかさに触れて、こんな都に早く帰りたいという願いを込めて、都の繁栄を讃えたものと思います。この頃から「青丹よし」は、「青色や赤色に彩られた(都)」と意味づけられるようになったと思われます。

⑨「龍たつの馬まも 今も得てしか あをによし(阿遠尔与志)

奈良の都(奈良乃美夜古)に 行きて来むため」(5-806番)

「龍たつの馬まを 我は求めむ あをによし(阿遠尔与志)

奈良の都(奈良乃美夜古)に 来む人のたに(ために)」(5-808番)

(龍の馬=竜馬りゅうめ、駿馬 太宰帥そち大伴旅人と都の女性との歌のやりとりか。729年頃)尚、「奈良の都」に掛けて用いた例は、「青丹よし」を用いた27首中に、9例あります。やがて、「奈良の人」「奈良の大道おほち」などにも掛け、「都の人」「都大路」を意味するようにもなっています。

⑩「玉津島 よく見ていませ あをによし(青丹吉)

奈良なる人(平城有人)の 待ち問わば如何に」(7-1215番)

(紀伊国に旅をした官人たちの宴会で、若浦和歌の浦の遊行女婦が詠んだと見られる歌。)

⑪「あをによし(安乎尔余志) 奈良の大道(奈良能於保知)は 行きよけど

この山道は 行き悪あしかりけり」(15-3728番)

(越前・武生に配流の身となった中臣宅守なかとみのやかもりが、道の途上で、都を想い、新妻を思い詠んだ歌。740年頃)

斯くして、「青丹よし」は、“奈良山の土”を褒める詞から、“都の色どり”を褒める詞に変容したとすることができます。このことは、「自然の大地」を讃える詞が、「造形された空間」を讃える詞に転換したとも言えるものです。

そして、「青丹よし・都」と詠む歌は、都から遠く離れた地で詠まれた歌に多いという特徴が見られます。新羅国に向かう使人の歌⑫、越中における(746-751年)大伴家持の歌⑬などでは、“青色赤色に彩られた都”をイメージするよりはむしろ、“会いたい人懐かしい人が住んでいる所”をイメージして、用いられたと思います。

⑫「あをによし(安乎尔余志) 奈良の都(奈良能美也故)に 行く人もがも

草枕 旅行く船の 泊とまり告げむに」(15-3612番)

(都に行く人があればよいのになあ。今、船泊まりしている所を告げることができるのになあ。)

⑬「あをによし(安乎尔与志) 奈良人(奈良比等)見むと 我が背子が

標しめけむ黄葉もみち 地つちに落ちめやも」(19-4223番)

(都のお人が見るために、あなたが標を結った紅葉、葉が落ちてしまうことなどないように。)

